

日本西スラヴ学研究会 2011年度 研究発表会 プログラム

[会場]：北海道大学スラブ研究センター 4階大会議室（両日とも）

[日時]： 2012年3月15日（木） 13:30～18:15 《パネル発表》

2012年3月16日（金） 10:00～12:15 《研究発表》

2012年3月15日（木） 《パネル発表》

13:30 - 18:15 《パネル発表》： 東欧文学における「東」のイメージ

概要：本企画では「東欧文学」という古い枠組をあえて用い、同文化圏における「東」のイメージについて考察する。この地域の文化が、東西の空間軸における自らの位置づけについて常に意識的であり続けていることがそのひとつの理由である。「東」とは、西欧からこの地域に向けられる他者の眼差しでもありえるし、東欧自体が外部（ロシア、アジア）や内側（ユダヤ、ロマ）の東的要素を映し出す表象でもありうる。東欧文学における東のイメージを、「人間の移動」と「空間のイメージ」の二つの側面から明らかにする。第一パネル（移動の文学）では、阿部報告が東（旧ソ連地域）への移動、井上報告は西への移動、小椋報告は双方への移動を扱い、テキストにおいて東西の移動が持つ意味や機能を考察する。三報告の比較によって、移民文学や紀行文学を統合する「移動の文学」の可能性が浮かび上がるはずである。第二パネル（空間のイメージ）では、越野報告と田中報告がポーランド文学における東への眼差し（東部国境地域クレスィ、ユダヤ性）、奥山報告が西欧の読者に向けて書かれた東欧（ルーマニア）のイメージについて分析する。三報告を比較することで、東欧をめぐる「東」の空間的なイメージを明らかにしたい。

第一パネル「移動の文学」 13:30 - 15:30

コメンテーター：西成彦（立命館大学） 司会：越野剛（北海道大学）

報告者：阿部賢一（立教大学）

題目：「ヤーヒム・トポルの小説における〈移動〉の位相」

本報告では、チェコの現代作家ヤーヒム・トポル（1962）の小説『冷たい大地を』（2009）を題材として取り上げ、作品内における移動、とりわけ「東」への移動と叙述の関係について考察を行なう。

報告者：小椋彩（東京大学）

題目：「オルガ・トカルチュクの『逃亡派』と新しい「紀行文学」について」

ロシア正教のセクト「逃亡派」にインスピレーションを得て書かれた長編小説『逃亡派』（2007）は、「移動」をモチーフにした100余りの断片から成る。2008年度ニケ賞を受賞した本作を中心に、トカルチュクの文学における「旅」「東西」「可動性」について検討する。

報告者：井上暁子（北海道大学）

題目：「地域の放浪、定位の旅—移動する作家ヤヌシュ・ルドニツキの文学における「場所性」

本報告では、社会主義末期西ドイツへ移住し、冷戦崩壊後もドイツにとどまり創作を続けるポーランド人作家ヤヌシュ・ルドニツキ(1956-)の文学における、場所/地域の描かれ方について考察する。1990年以降に書かれたルドニツキの作品には、ポーランド西部国境地帯を放浪する語り手が登場する。ポーランド西部国境地帯出身作家でありながら、移動者でもある彼が、地域の「場所性」をどのように描き出すのかを紹介する。

15:45-17:45 第二パネル「空間のイメージ」

コメンテーター：久山宏一（東京外国語大学）、司会：小椋彩（東京大学）

報告者：奥山史亮（北海道大学）

題目：「文化参事官エリアーデがみた「ルーマニア」と「ポルトガル」

ミルチア・エリアーデは、サラザール政権下のポルトガルにおいて、在リスボンのルーマニア大使館に文化参事官として勤務した。本報告では、ルーマニア文化をポルトガルに紹介するためにエリアーデが書いた資料から東（ルーマニア）と西（ポルトガル）に関する記述を抽出し、その特徴を明らかにする。

報告者：越野剛（北海道大学）

題目：「ポーランド文学における「ベラルーシ派」—ヤン・バルシュチェフスキを中心に」

ポーランド語で『ベラルーシ幻想譚』(1844-46年)を書いたJan Barszczewskiはポーランドではマイナーだが、ベラルーシではよく名前を知られた作家である。ポーランド文学における東部地域（ベラルーシ）のイメージ、および現代ベラルーシにおけるバルシュチェフスキの位置づけについて考察する。

報告者：田中壮泰（立命館大学）

題目：「デボラ・フォーゲルの作品におけるユダヤ的モチーフについて」

戦間期ガリツィアで活躍した美学者兼詩人のデボラ・フォーゲル(1900-1942)は、ポーランドの作家ブルーノ・シュルツの恋人として、一部のシュルツ研究者にのみ知られる存在であったが、近年、彼女の作品に対する再評価の機運が高まりつつある。フォーゲルはポーランド語とイディッシュ語でものを書いた。その詩は西欧アバンギャルドの手法を積極的に取り入れ、主題も都会的なものが多い。しかし彼女はイディッシュ語使用者として、ユダヤの伝統あるいは「ユダヤ性」といった問題に無関心ではいらなかった。フォーゲルの作品から「西欧文化」を潜り抜けた上で「再発見」されるユダヤ/東欧のモチーフを読み解きたい。

17:45-18:15 全体討論

(終了後、懇親会)

2012年3月16日(金) 《研究発表》

10:00-10:25 司会:久山宏一(東京外国語大学)

報告者:金沢 文緒(日本学術振興会特別研究員)

題目:「ポーランド国王としてのアウグスト3世—ベルナルド・ベロットの寓意画の考察—」

ベルナルド・ベロットが1762年にドレスデンで制作した政治的寓意画の対作品は、主題解釈や着想源などに関してまだ不明な点が多く残されている。これを受けて本発表では、作品の注文主であるザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト2世が当時アウグスト3世としてポーランド国王を兼任していた点に注目し、ザクセン=ポーランド連合の二重統治下における宮廷芸術という側面から改めて考察を進め、当時のポーランドの歴史的背景を考慮しながら作品の再解釈を試みる。

10:25-10:50 司会:橋本聡(北海道大学)

報告者:西原 周子(北海道大学大学院文学研究科歴史地域文化学専攻修士課程)

題目:「サヴァ・ムルカリによる表記システムと二重字の考察」

本年度に執筆した修士論文の一部から、サヴァ・ムルカリが『厚いイエルの脂肪』(1810年)で提唱したセルビア語の表記法について述べる。ムルカリはこの作品において、当時使用されていたキリル文字に対する評価と分類、およびそれに基づいたアルファベットの整理を行った。それに対し、ムルカリのアルファベットに残された二重字についての考察を行い、ヴーク・カラジッチによる正書法にどう繋がっていったかを論じる。

10:50-11:05 休憩

11:05-11:30 司会:阿部賢一(立教大学)

報告者:中村 寿(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

題目:「ユダヤ的なもの」を求めて:「プラハにおけるユダヤ的隔週新聞『自衛』」について」

『自衛』(Selbstwehr – Unabhängige jüdische Wochenschrift)は、1907年から1938年までプラハで継続的に発行されたドイツ語の学生シオニスト機関のための隔週新聞である。『自衛』は、『掟の門(Vor dem Gesetz)』を初めとするカフカの小作品を初めて掲載した場として、その重要性は以前から認められていたが、ユダヤ国民主義(=シオニズム)新聞としての『自衛』における言説そのものが検討されることはきわめて少なかった。本報告では、『自衛』の創刊後間もなくの記事を考察の対象とし、プラハにおけるドイツ語の学生シオニストが何を目指していたのかについて言及する。

11:30-11:55 司会:堤正典(神奈川大学)

報告者:橋本 聡(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院)

題目:「EU 東方拡大と超国家的言語政策」

ベルリンの壁崩壊以後のヨーロッパでは、新しい秩序と統合が模索されるなか、言語政策の分野でも国境を超えた共通の枠組み作りが推進されてきた。その過程でEUが東方拡大を選択したことは、ヨーロッパ共通の言語政策が輪郭を整える重要な契機になったといえる。そこでこの発表では、チェコやスロヴァキアといったEU新規加盟国が言語政策における「ヨーロッパ・スタンダード」をどのように受け入れ、その結果どのような変化が生じたのかを概観する。その際、「多言語性」対「単一言語性」ないし「民主主義」対「経済」、あるいは「超国家」対「国家」といった対立軸の推移に注目し、

それぞれ前者を理念とするヨーロッパ共通の言語政策の成果を検証したい。

11 : 55 - 12 : 15 全体討論